

# 常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 4年10月 7日(金)

その1 通算 263号

## ◇ 本校の大銀杏 (左側) + α

おいちょう



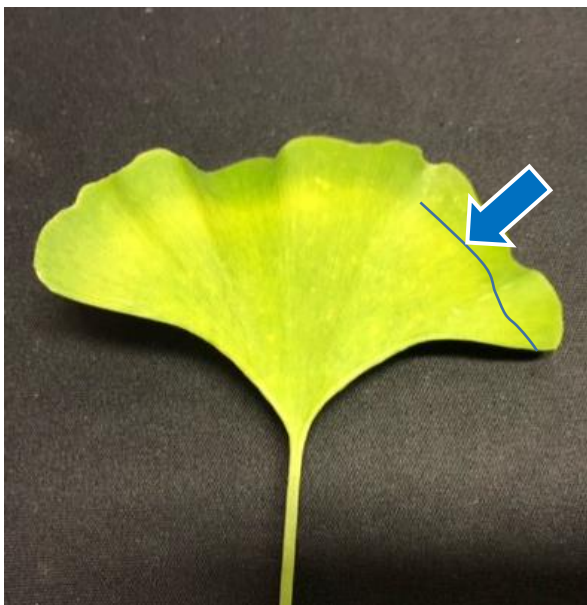
玄関前で悠々とそびえ立つ2本の「大銀杏」<sup>おいちょう</sup>。他に先んじて葉の色を「秋色」に変えつつある。遠目に全景を捉えた「色味」<sup>いろみ</sup>は、「黄色が強い明るい黄緑」といったところか。

落葉もちらほらと確認できる。台風接近による強風の影響もあったろうが、鈴生りに備えた実も、ぽつぽつと落とし始めた。

実はしっかりと熟したおらず、自然落下ではなく、外的要因による落下によるものだろう。よって、独特の香りはほとんど感じられない。

ご存じのとおり「銀杏」<sup>いちよう</sup>の実は「銀杏」<sup>ぎんなん</sup>。樹木と実に同じ漢字を充てるところが、面白い。

さて、遠目で見る分には気づかなかった大銀杏であるが、近くに寄ることで見つけた新たな発見があった。葉色の「変化の仕方」である。



☞左写真は左の大銀杏の葉。

葉の先端から少し下がったところに、うっすらと黄色い帯が入っている（青線・青➡）のが確認できる。

つまり、緑葉から黄葉への変化は、青➡の位置から葉の軸に向けて始まっていることが分かる。

普通に考えれば、幹や枝から遠い位置、つまり「葉の先端から変化が生じると考える」のだが、そうではなかった。



☞左の写真は、もう少し変化が進んだもの。

黄色い帯が、はっきりと分かる。黄色い帯の下方は大きく黄色に変化し、緑色を残すのは葉の先端と軸付近(葉の下の方)のみとなった。

左大銀杏のおおよその葉がこの状態にある。  
「こんなんだっけ?」と、個人的には大発見だ。

ところがである。

右の大銀杏に目を移すと、左の大銀杏と同様に变化した葉がごくまれに確認できるものの、明らかに黄葉への変化の仕方が異なる。

早速、ネットで画像検索してみた結果が以下のとおりだ。



検索画像のいずれもが葉の先端から順に黄色に変化しているのだ。

先に述べた「黄色い帯」は確認できる。けれども、変化しているのは帯から葉の先端に向けた部分で、本校の左大銀杏と真逆なのだ。

☞この画像では「枯れ」も確認できるが、枯れた箇所は葉の先端だ。

検索数の少なさはあるものの、本校の大銀杏のような画像は確認できなかった。  
<結論>

「個体差のある銀杏の黄葉への変化だが、本校の左側の大銀杏は、極めて珍しい」

…ということにしておこう。

---

上着が必要になる頃、大銀杏は全身を<sup>こがねいろ</sup>黄金色に包む。加えて、奥の2本の大木「アメリカフウ(アメリカ<sup>ふう</sup>楓・紅葉<sup>もみじ</sup>葉<sup>ば</sup>楓)」は、相互に際立たせる<sup>こうよう</sup>紅葉を<sup>まと</sup>纏う。「黄金」と「真紅」。本校が誇る大木が秋色を深くし、「ミニ香嵐溪」に姿を変える。